資料紹介：邑南町御華山墳墓

大野 芳典・吉川　正・真木 大空・今福 拓哉

はじめに

御華山墳墓は旧瑞穂町による水道施設（貯水タンク）建設に伴い不時発見された遺跡であり、昭和43（1968）年12月に緊急発掘調査が行われた。これまで、調査担当者であった門脇俊彦氏による報告（門脇編1969）のほか、1976年には瑞穂町史での報告（瑞穂町1976）がされている。そこでは、遺構や出土土器の情報が公開され、墳丘を伴わない箱式石棺であることが指摘されている。なお、不時発見に対応する調査であったため、わずか２日間での調査であり、周辺地形測量は行われていない。

このような状況の中で、御華山墳墓を実見する機会があり、現地を確認したところ、調査地点付近が周囲より一段高く、墳丘を伴う墳墓（墳丘墓）であることが想定できた。そのため、御華山墳墓の周辺地形測量を行い、『墳丘墓』としての再評価を試みたい。

なお、御華山墳墓の発掘調査時の調査記録類（実測図・写真など）は、門脇氏が発掘調査に携わったその他の遺跡資料とともに島根県古代文化センターで一括して保管されている。今回、実見する機会をいただいた。また、出土遺物はすべて邑南町教育委員会が所蔵し、一部は邑南町郷土館において公開されている。

１．御華山墳墓を取り巻く地理・歴史的環境

（１）地理的環境

御華山墳墓は島根県西部（石見国）、中国山地のほぼ中央に位置する邑智郡邑南町大字鱒渕字御華山に位置する。当遺跡は、広島県（安芸国）境を東西に跨る高原状の盆地（石見高原）の一つ、出羽盆地に所在する。この盆地は中央を東流する出羽川によって形成された平坦地を中心としていくつかの幅広い支谷を持つ。出羽川は江の川の支流で、標高300～400ｍの氾濫原の両岸に顕著な河岸段丘を残している。この段丘上には、約40ヶ所に及ぶ弥生時代前期から奈良・平安時代までの集落遺跡が広がっている（第１図）。

当遺跡を後背地とする河岸段丘上には鱒渕集落が広がり、土師器・須恵器を多数出土した竹前遺跡（同図３）をはじめとして広範囲に土器片の散布がみられる。御華山墳墓はその段丘頂部に構築され、その南側の尾根上には御華山古墳群が展開し、東端部に位置する鱒渕古墳群（同図２）とあわせて20基以上の古墳が確認されている。眼下には出羽盆地の大部分が望まれ、出羽川を隔てた対岸には長尾原遺跡（同図15）を見下ろすことができる。また、田園地帯の彼方に丸瀬山・阿佐山等々、石見と安芸の国境をなす1,000ｍ級の連峰を望む。

（２）歴史的環境

邑南町には約950ヶ所の遺跡が確認されており、その内の約600ヶ所が瑞穂地域に所在する。その半数以上の約300ヶ所が製鉄遺跡である。以下、周辺遺跡の概要を記載し、歴史的環境に代えたい。

旧石器時代の遺跡はわずかで、横道遺跡、坂根谷遺跡、荒槇遺跡及び堀田上遺跡が知られている。

縄文時代の遺跡も少なく、郷路橋遺跡、今佐屋山遺跡、川ノ免遺跡、道城遺跡などがある。

弥生時代前期では、順庵原遺跡（同図９・10）や牛塚原遺跡（同図12）が確認されている。福音寺遺跡（同図25）では木葉文を施した土器片が出土している。弥生時代中期になると遺跡数が増加し、順庵原遺跡や沢陸遺跡（同図23）、長尾原遺跡では住居跡も検出されている。これらの遺跡は出羽盆地南側の段丘上に位置しており、農耕が沖積地を望む湧水地点に近いところから始まったことを示しているといえる。弥生時代後期になると遺跡数はさらに増加し、多くの遺跡が出羽川両岸に位置する段丘上や流域各地に分布するようになる。当該地域におけ

る弥生社会の充実化のなかで順庵原１号墓（同図８）が出現したとされる。順庵原１号墓は、後期中葉に遡る四隅突出型墳丘墓である。当該地域の弥生首長の墳墓として位置づけられている。隣接する順庵原遺跡や馬場山遺跡（同図11）では同時期頃の建物跡や大型の竪穴建物が検出されており、墓と関係の深い弥生集落の様相を探る上で注目される。

古墳時代の遺跡のうち、集落跡としては弥生時代から続く長尾原遺跡、順庵原遺跡に加え、狼原遺跡、今佐屋山遺跡などが確認されている。後期の長尾原遺跡では竪穴建物や鍛冶関連遺構、今佐屋山遺跡では竪穴建物や製鉄遺構が検出され、この時期における本格的な鉄生産が知られている。古墳は20ヶ所以上で確認されているが、その大部分は後期後葉～終末期に築造された小円墳と横穴墓である。古墳時代前期と考えられているものに御華山古墳群や鱒渕古墳群、坂根谷古墳群などがある。いずれも直径10m前後の円墳や方墳で、中には無墳丘のものもあるといわれている。なお、古墳時代から奈良・平安時代にわたる須恵器の窯跡も数多く確認されており、島根県有数の須恵器生産地であったといえる。

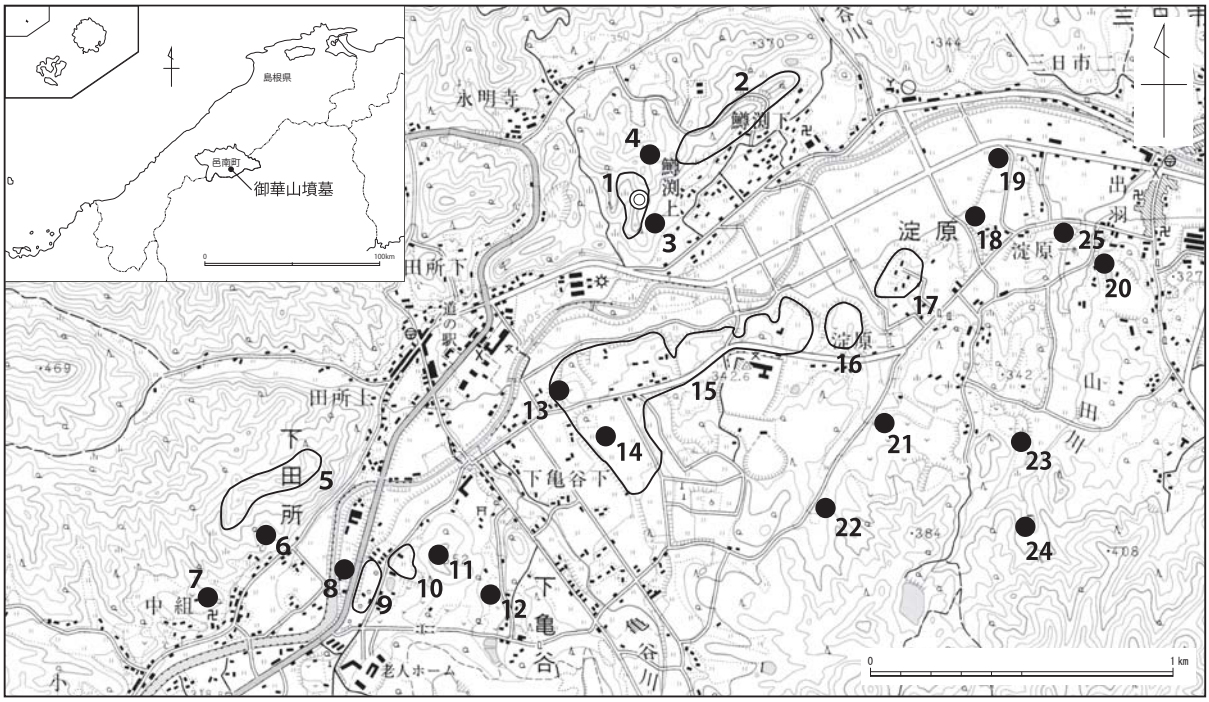
中世以降の遺跡としては、山城跡や製鉄遺跡が多く確認されている。二ツ山城跡は出羽氏が築城した山城で、その規模、構造において県内屈指である。また高橋氏の本城跡などの他、砦跡が確認されている。

中近世の製鉄関連遺跡では、製錬所であるたたら跡や大鍛冶場跡、砂鉄採取の鉄穴場跡や切羽なども地区全域に分布しており、製鉄が盛んにおこなわれていたことを想定できる。　（大野・吉川）

２．地形測量とその成果

（１）地形測量の手順と方法

御華山墳墓は鱒渕地区の集落からの比高約70mの丘陵頂に位置している。前述したように、不時発見であったこともあり、周辺地形を含めた測量調査は未実施であった。そこで、今回地形測量を実施した。地形測量は2023年11月19日に行い、ソキア・トプコン社のトータルステーションを用いた点群測量を実施した（写真１）。遺跡



１御華山墳墓・御華山古墳群　２鱒渕古墳群　３竹前遺跡　４増屋横穴墓　５南古墳群　６南遺跡　７神宮遺跡
８順庵原１号墓　９順庵原Ｂ遺跡　10 順庵原Ａ遺跡　11 馬場山遺跡　12 牛塚原遺跡　13 長尾原Ｂ古墳群
14 長尾原Ａ古墳群　15 長尾原遺跡　16 若林遺跡　17 淀原遺跡　18 オセド遺跡　19 小絵堂遺跡
20 旅行村グラウンド窯跡　21 江迫横穴墓群　22 江迫窯跡　23 沢陸遺跡　24 滝ケ谷遺跡　25 福音寺遺跡

第１図　御華山墳墓周辺遺跡分布図（S ＝ 1/25,000）

が所在する丘陵上には、邑南町実施の地籍調査業務による公共測量杭が打設されており、これらを基準として測量調査を行った。しかし、杭の座標値が不明であったため当日は局地座標を用いて測量し、後日入手した公共測量成果をもとに地形の復元を行った。

現地には、発掘調査の契機となった水道施設が現存し、周辺はフェンスで囲まれていたため、その内部の測量は行っていない。まず、フェンス北側の測量を行い、順次南側へ測量を進めた。

写真１　測量作業風景

（２）測量成果（第２図）

発掘調査された石棺はおそらくフェンスの内側に存在したものと考えられる。この水道施設は周囲から50㎝～１ｍほど高くなっており、あたかも墳丘のようにみえるが（写真図版１－ａ）、これは工事時の盛土と考えられる。測量調査の結果、水道施設の北西側に8.2ｍ×6.4ｍの平坦面、南東側に幅約8.6ｍ、高さ約80cmの高まりを確認した。現地観察により、南東側の高まりを含む一帯が御華山墳墓の墳丘の一部ではないかと考えられた。南西側の斜面には石が露出している箇所もあり、貼石をともなう墳丘墓の可能性も考えられる（写真２）。なお、この高まりから落ち込みを挟んだ南側の円丘部は古墳と考えられ、同丘陵上に展開する御華山古墳群（瑞穂町1985）の一つであろう（写真図版１－ｂ）。

写真２　墳丘斜面付近で確認した石

御華山墳墓を墳丘墓と仮定すると、現地の観察と石棺の想定位置からその規模は12.3ｍ×8.6ｍ程度になると思われる（第２図）。この場合、石棺の位置が墳丘北西辺に偏っているため、複数の埋葬施設が存在する可能性もあるだろう[1]。

（真木・今福）

３．検出遺構と出土土器

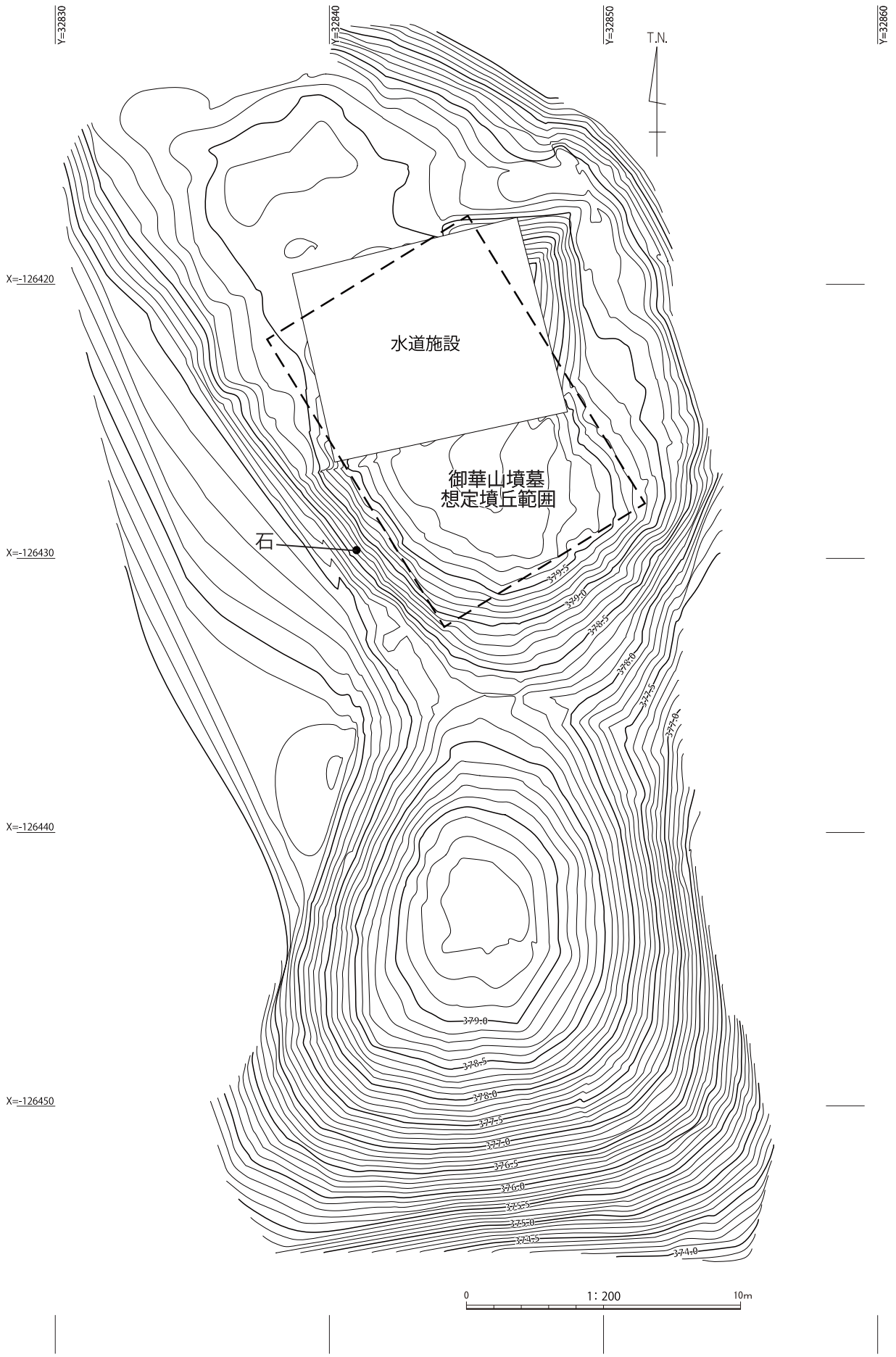
本章では、門脇氏の発掘調査により検出した遺構（箱式石棺）と出土遺物の紹介を行う。なお、箱式石棺については本稿を作成するにあたり調査原図を確認した際に得られた新たな知見をふまえて記載した。出土土器についても同様に、再実測を行い、観察者の知見をふまえて記載した。

（１）検出遺構

御華山墳墓では箱式石棺を１基検出している（第３図）。水道施設整備に伴う掘削作業中に箱式石棺が露出している。なお、工事関係者が蓋石を外し、内部を確認した際には人骨が遺存していたようである。

墓壙上面の検出規模は、全長約2.70ｍ、最大幅約1.70ｍとなり、隅丸長方形プランを呈する。墓壙底面の規模は、全長約2.24ｍ、最大幅約1.26ｍとなる。墓壙は地山直上から掘り込まれ、深さは最大1.20ｍとなる。墓壙内部には板状の割石によってつくられた箱式石棺が安置されている。断面図より、墓壙底面は板石を墓壙内部に設置する際に掘り込まれていることがわかる。箱式石棺はほぼ完全に遺存しており、内法で全長約1.88ｍ、幅は西側で約0.52ｍ、東側で約0.30ｍとなり、西に頭をむけて遺骸を安置していたようである。棺外には少なくとも蓋石より下方まで幅約15㎝の厚さで粘土が検出されており、棺材の裏込めとして施されている可能性が高い。また、記録図面には棺内への流入土の記載がなく、蓋石除去後の記録写真（写真３）では側石上方まで粘土がおよんでいることがわかる。この粘土の上方に蓋石が置かれており、石棺を密閉するための目張りとして粘土を使用したことも考えられる[2]。

棺内床面は中央付近がU字状にくぼんでいるものの、その上方に盛土が施されていたことが想定されている。そのため、棺底は平坦であったと推測される。なお、棺内には先述したように人骨が遺存していたものの、副葬



第２図　御華山墳墓地形測量図（S ＝ 1/200）

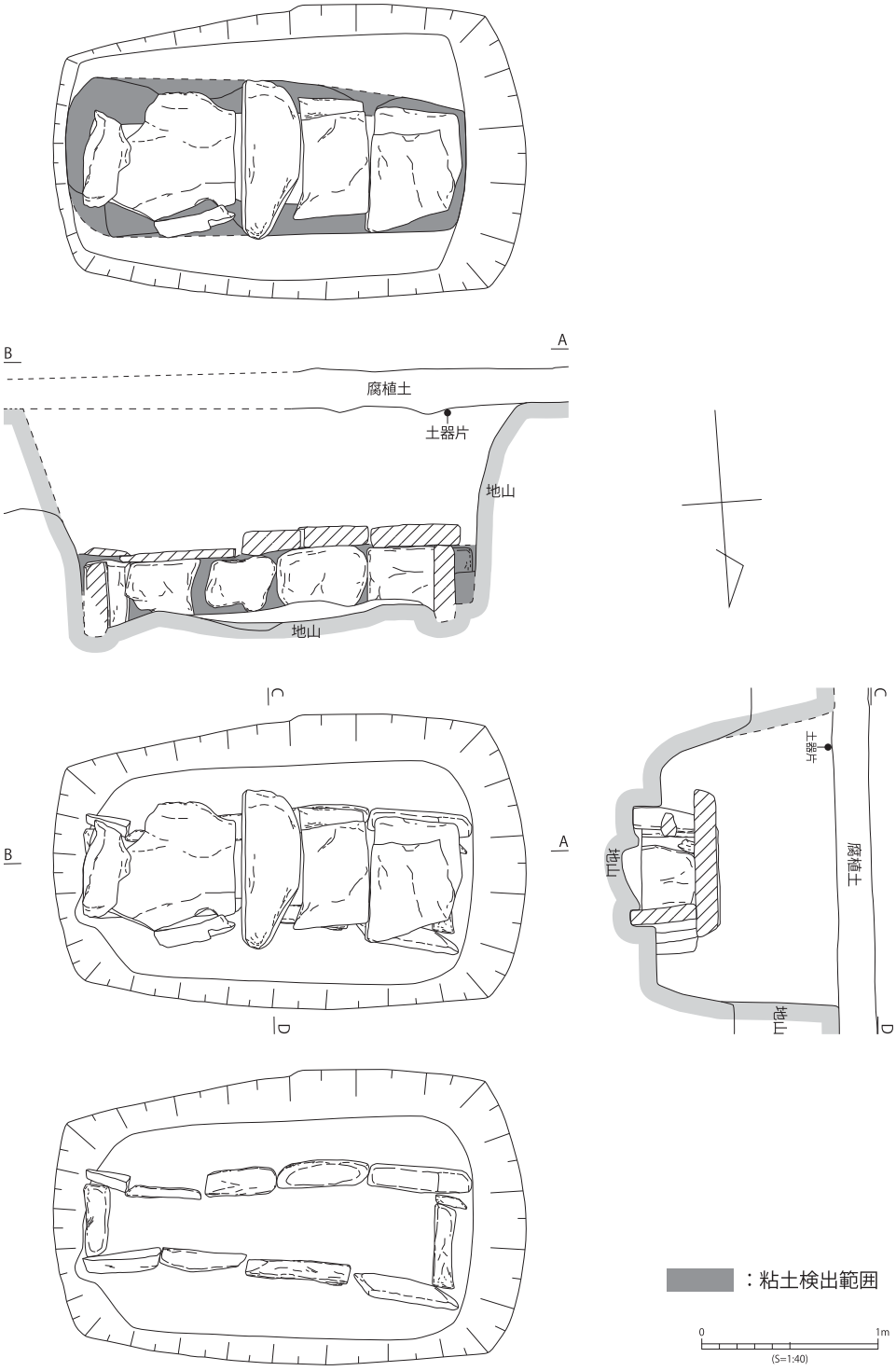
品は確認されていない。ただし、墓壙上面付近から土器が出土している。出土位置から埋葬に伴い供献された土器である可能性が高い。

（今福）

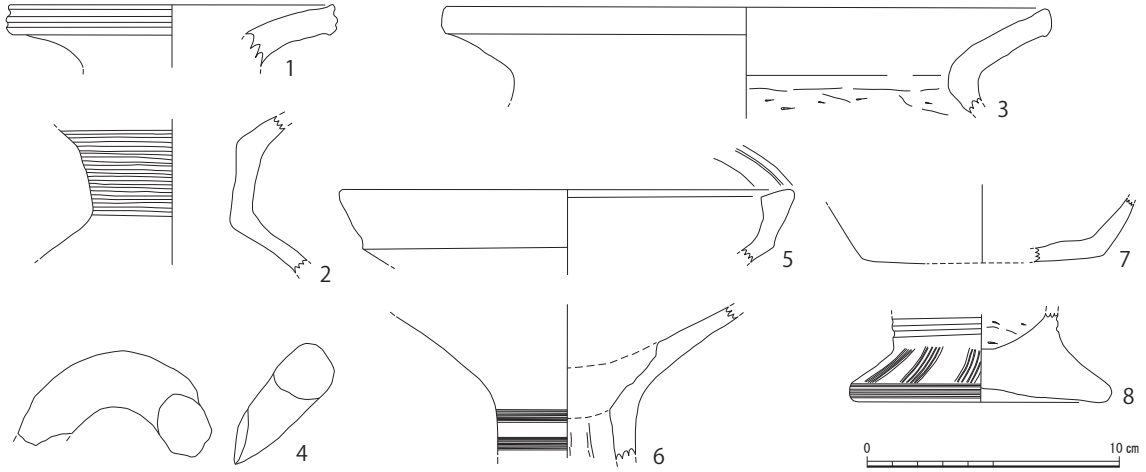
（２）出土土器

元報告（門脇編1969・瑞穂町1976）によると、遺物の出土状況は、「すべて墓坑上面から出土しており、石棺内からは全く検出することができなかった。（中略）その出土した範囲は限られたせまい範囲であって、墓坑の上面西南隅にかためて置かれていたものと推察

写真３　粘土検出状況



第３図　石棺墓（S ＝ 1/40）



第４図　御華山墳墓出土遺物（S＝1/3）

できた。」とある。また、「その想定される土器片出土状態から、埋葬当初、土器完形品がこの位置におかれていたとは考え難く、おそらく最初から破砕された土器片を置いていたものと推測することができた。」とされる。現在遺存する土器片から出土状況や供献状態を推定することはできないが、ここで紹介する土器は墓坑上面に何らかの状態で供献されていたものとしておきたい。

土器は全８点である（第４図・第２表）。現在邑南町教育委員会で所在が確認できるものは５点であり、それ以外は瑞穂町誌（瑞穂町1976）から再トレースした。なお、既報告（瑞穂町1969・1976）で報告されている土器が若干異なっているが、ここではすべてを御華山墳墓に関する土器として報告する。

１は広口壺の口縁部である。口縁端部は風化しているが、２条の凹線文が施されている。２は所在不明の壺頸部である。瑞穂町誌（瑞穂町1976）では「横にハケ様の浅い施文が施されている。」とされ、擬凹線文と想定される。３は甕の口縁部である。口縁端部はほぼ拡張せず、端部は風化しており施文の有無は不明である。内面の頸部より下にはケズリが確認できる。４は把手である。片側の貼付面が遺存しており、角度的に胴部最大径部直下に貼り付けられたものと想定できる。器種は鉢のような器形であろうか。５は所在不明の高坏受部である。体部はやや屈曲して稜をもつ。口縁部はゆるやかに肥厚し、端部には沈線１条が施されている。６は高坏の受部下位から脚柱部にかけてである。５と同一個体かは断定できないがその可能性もある。脚柱部外面には２条の櫛描直線文が間帯をもって施されている。接合方法は円盤充填で、円盤が剥離したことによる段差を確認できる。こうした文様をもつ高坏は備中地域に多い。７は所在不明の底部である。壺もしくは甕の底部であろうか。８は脚台部である。底部は若干の上げ底で非常に厚い。脚柱部には凹線２条、脚裾部には縦位、脚端部には横位の櫛描文が施されている。内部にはケズリが確認でき、壺形土器が載るものと想定される。

これらの土器は全体としてＶ－１様式の特徴をもち、高坏や脚台部の櫛描文は古い要素と捉えられる。河合忍氏による時期区分（河合2015）の後期Ⅰ－１～Ⅰ－２併行期としておきたい。型式的特徴は比較的まとまりのあるもので、胎土も砂粒の量に器種ごとの違いがみられる程度で、色調も含めて非常に類似している。御華山墳墓に一括して供献された土器と考えて問題ないように思われる。（真木）

４．まとめと課題

これまで、門脇氏による発掘調査記録の再確認を実施するとともに、不足していた周辺地形の把握を目的とした測量調査成果について報告した。得られた新たな知見について、下記で整理し、まとめに代えるとともに課題について抽出する。

（１）御華山墳墓について

前述したように、門脇氏による1968年の緊急発掘調査成果の再確認および測量調査、遺物の再実測を実施した結果、長軸12.3m、短軸8.6m、高さ0.8mの墳丘墓であることを推定した。出土土器より、弥生時代後期前葉頃の築造時期が想定される。なお、想定した墳丘墓から続く斜面に礫が確認でき、貼石を伴う可能性もある。

墳丘墓に伴う墓壙は調査範囲で１基検出しており、検出面で全長約2.70m、最大幅約1.70m、深さ約1.20mである。埋葬施設は箱式石棺であり、内法で全長約1.88m、幅は西側で約0.52m、東側で約0.30mとなり、西に頭をむけて遺骸を安置していたことが想定される。棺の裏込めに粘土が使用されており、石棺を被覆していた可能性も残る。

調査対象となった石棺墓は墳丘頂部平坦面北西部に位置しており、検出墓壙の正確な箇所は不明なものの、平坦面中央ではない。さらに南東方向へ墓壙が並ぶことを想定できる。

（２）課題

以上のように、調査当初、墳丘を持たない墓壙として報告された御華山墳墓について、調査資料の再検討および測量調査の結果、弥生時代後期前葉の墳丘墓である可能性が考えられた。ただし、御華山墳墓を弥生墳丘墓としてとらえた場合、複数の課題も同時に浮上した。下記に課題を示す。

調査報告内容の検証について

1968年の調査報告（門脇編1969）によると、地表面下層はすべて地山であり、検出された墓壙は地山を掘り込んでいる状況が報告されている。このことから、地山削り出しによる墳丘構築が想定できる。検出された墓壙の深さは約1.20mとなり、同時期の山陰地方の長軸が同規模の墓壙と比較すると深い。また、時期は新しくなるが、邑南町内の墳丘墓[3]と比較するとかなり深いことがわかる（第５図）。このことから、墓壙の掘り込み面を本来より高い位置であると誤認した可能性も想定できる[4]。この仮定が正しい場合、地表直下の層が地山層でなく、地山由来の盛土であることになる。また、墓壙の構築方法も墳丘完成後の掘り込み（墳丘先行型）ではなく、墳丘完成以前の墓壙掘り込み（墳丘後行型あるいは同時進行型）となる。出土土器もＶ－１様式であり、後者の墓壙構築方法が確認されている時期との矛盾は生じないため、検証が必要である。

資料化について

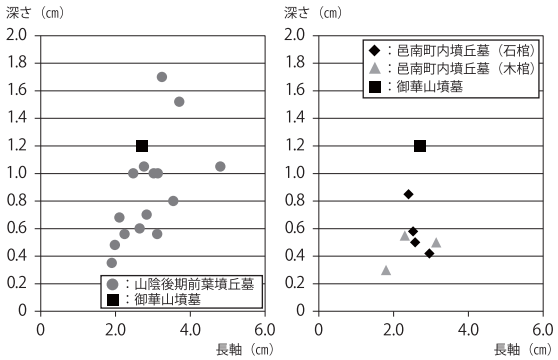
今回、資料の再評価により墳丘墓であることを指摘したが、墳丘墓中央付近から南側にかけて未調査である。そのため、埋葬配置や未検出の墓壙などの墳丘頂部平坦面全体の様相は不明である。周辺地域や山陰地方全体での比較検討を行う上で必要な情報が不足している。

棺種の選択および地域間交流について

隣接する広島県北部では、弥生時代後期になると埋葬施設に石棺を採用するようになることが知られており[5]、邑南町内に所在する順庵原１号墓や輪之内墳丘墓も同様である。こうした町内の弥生墳墓の中でも御華山墳墓は最古級の事例であり、地域間交流の様相や棺形態の選択過程を検討していく必要がある。　（真木・今福）

おわりに

以上のように、御華山墳墓は弥生時代後期前葉の墳丘墓であることを指摘した。その一方で、周辺事例との比較検討を行うための資料化については依然として課題が残ることも明らかとなった。これらの課題解決には追加の現地調査が必要である。山陰地方の当該時期の弥生墳丘墓は、墓壙構築方法の変化が生じており、墓制の画期



第５図　墓壙の深さ（右：山陰後期前葉の墳丘墓検出墓壙、左：邑南町内墳丘墓検出墓壙）

が認められる。しかし、資料数が少なく、様相の解明にもさらなる資料の増加が望まれる状況である。今後、発掘調査が実施された場合、あらためて検証したい。

註

（1）推定した墳丘は丘陵尾根筋に沿って存在しており、墳丘長軸の主軸は北西－南東方向と想定できた。これに対し、検出した墓壙の長軸は東西方向となることから、墳丘長軸に直交するように墓壙が配置されているものと考えられる。このような墳丘主軸と墓壙配置の状況をふまえると、墳丘長軸に直交するように複数の墓壙が並列して配置されている状況を想定できる。

（2）検出された箱式石棺には棺材の裏込めとして粘土を施していることが確認できた。検出した石棺側石をみると、側石どうしが接しているものの組み合っておらず、床面と点で接している側石も認められる。構造としてやや脆弱な印象を受け、粘土による被覆も含めた一体的な棺構造をしていた可能性が高い。

（3）邑南町内の類似資料として順庵原１号墓（仁木編2007）および輪之内墳丘墓（大野ほか2023）がある。いずれも弥生時代後期中葉頃の築造時期が想定されている。

（4）墓壙の掘り込み面については写真図版２-ｂなどの調査時記録写真を熟覧した結果、石棺蓋石より上方で墓壙壁面の土層が異なっているようにも見受けられる。この土層より墓壙が掘り込まれている可能性も否定できない。

（5）例えば広島県北広島町歳ノ神墳墓群（佐々木編1986）などが挙げられる。

参考文献

今福拓哉　2021「山陰弥生墳丘墓の発達過程について」『島根考古学会誌』第38集。

邑南町教育委員会　2005『福音寺遺跡・高見屋横瓦窯跡・出羽代官所跡・風呂ノ上遺跡発掘調査報告書』。

邑南町教育委員会　2005『馬場山遺跡・順庵原Ｂ遺跡・長尾原遺跡発掘調査報告書』。

大野芳典・真木大空・今福拓哉　2023「資料紹介：邑南町輪之内墳丘墓」『古代文化研究』第31号、島根県古代文化センター。

門脇俊彦編　1969『御華山彌生式墳墓調査概報』瑞穂町教育委員会。

河合　忍　2015「中国・四国」『弥生土器』考古調査ハンドブック12、ニューサイエンス社。

佐々木直彦編　1986『歳ノ神墳墓群・中出勝負峠墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集、㈶広島県埋蔵文化財調査センター。

仁木　聡編　2007『順庵原1号墓の研究』島根県古代文化センター研究調査報告書37、島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター。

瑞穂町教育委員会　1976「御華山墳墓」『瑞穂町誌』第３集。

瑞穂町教育委員会　1985『島根県邑智郡瑞穂町内遺跡分布図Ⅰ－田所地区－』。

瑞穂町教育委員会　2000『町内遺跡発掘調査等報告書』。

第１表　御華山墳墓検出遺構一覧

遺構名	種類	墓壙規模（m）			埋葬施設規模（m）			出土遺物	備考
		長軸	最大幅	深さ	長軸	最大幅	深さ		
箱式石棺	箱式石棺	検出 2.70 床面 2.24	検出 1.70 床面 1.26	1.20	1.88	0.52	0.30	土器 （第４図）	粘土による被覆

第２表　御華山墳墓出土土器観察表

挿図番号	写真図版	出土位置	種別	器種	時期	法量 (cm) () 内復元	胎土	色調	文様・調整その他	備考
4-1	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	壺	後期前葉	口径（12.3）	2mm 程度の砂粒極少量 1mm 以下の砂粒多量	外：にぶい黄褐色 10YR7/4 内：にぶい黄褐色 7.5YR6/4	外：ナデ、凹線２条 内：ナデ	
4-2	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	壺	後期初頭					瑞穂町 1976 を再トレース
4-3	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	甕	後期前葉	口径（23.7）	2mm 以下の砂粒多量	外：橙色 5YR6/6 内：にぶい橙色 5YR6/4	外：ナデ 内：ナデ、ケズリ	
4-4	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	把手	後期前葉		2mm 以下の砂粒多量	橙色 5YR6/6	ナデ	
4-5	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	高坏	後期初頭					瑞穂町 1976 を再トレース
4-6	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	高坏	後期初頭	脚柱部 (5.5)	1mm 以下の砂粒少量	外：橙色 5YR6/6 内：橙色 7.5YR6/6	外：摩滅により不明 内：ナデ、シボリ	
4-7	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	壺 or 甕	後期？					瑞穂町 1976 を再トレース
4-8	2-d	石棺墓 墓壙上面	弥生土器	台付 壺？	後期初頭	底形（10.4）	2mm 程度の砂粒少量	外：にぶい橙色 7.5YR6/4 内：橙色 5YR6/6	外：ナデ、凹線２条、櫛描 内：ナデ、ケズリ	

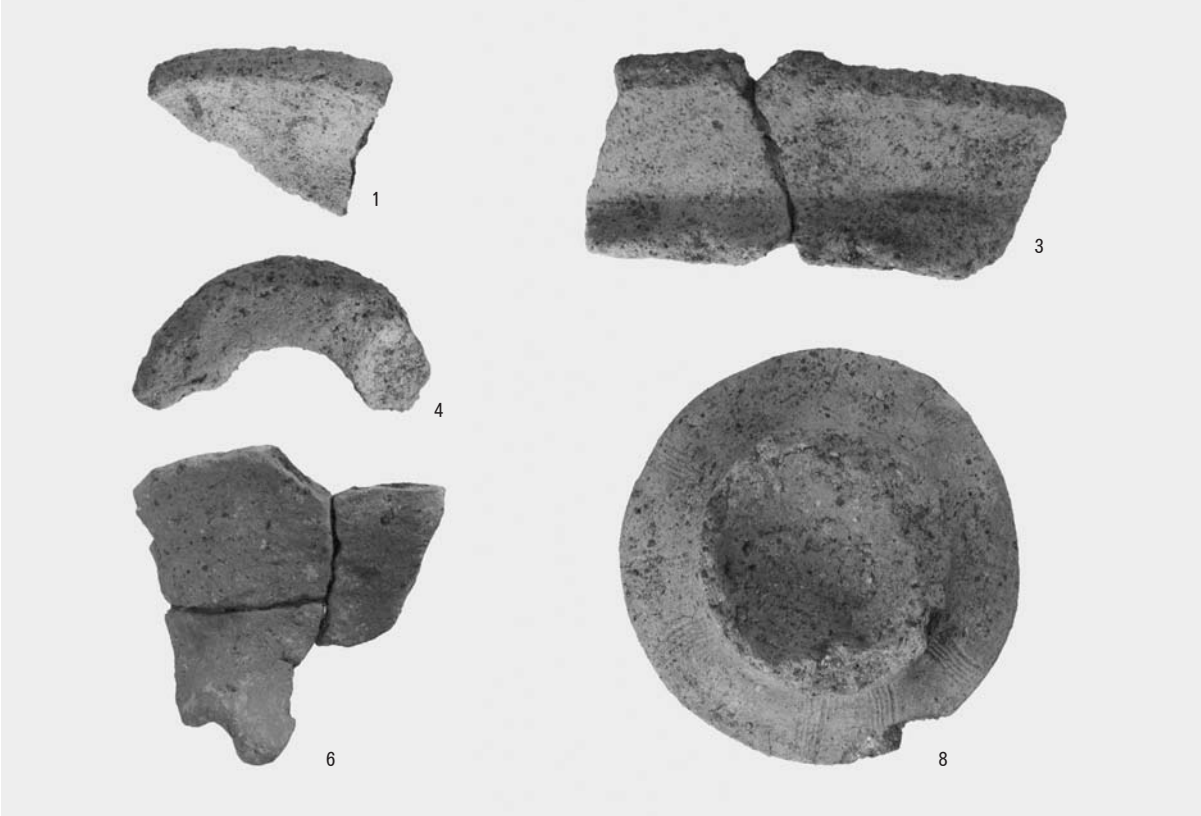
写真図版１- ａ　御華山墳墓現況（南東から）
（写真奥のフェンスが水道施設）

写真図版１- ｂ　御華山墳墓現況（北西から）
（手前が墳丘墓　奥の高まりは御華山古墳群）

写真図版２-a　石棺墓検出状況（北東から）

写真図版２-b　石棺墓南西隅土層堆積状況（北東から）

写真図版２-c　石棺墓完掘状況（西から）



写真図版２-d　御華山墳墓出土土器